

### 話し合い活動へのステップ

話し合い活動へのステップを少し書いてみたいと思います。

どこまでできるのか分かりません。

また、正しいかどうかも分かりません。ご批評をいただきたいと思います。

さて、指導ステップを解明する前に、考えてみたいことがあります。

それは、話し合い活動を指導する教師の前提となる条件はなんだろうか、ということです。

私は次のように考えます。

優れた話し合い活動を、実際に見聞きしたことがある。

例えば、私の話し合い活動の原風景は、中学生時代の全生研教師による学級討議であるし、学生になってからは、静岡の築地久子氏の討論の授業、向山洋一氏の「やまなし」の討論授業です。

教師が、始業からほとんど話さずとも、子どもたちだけで討論を組織していくそれらの実践の気高さに震えたものでした。それに、数ミリでも近づきたいというのが私の教師修行でした。

人は、見たり聞いたりしていないものに近づくことはできません。

通常は、「像(モデル)」が先にあり、それを目標に向上しようとするからです。

話し合い活動を指導する際には、まず子どもたちに教える前に、教師がそのイメージを持つことが大事だと考えます。

それで、教師が、イメージを持てれば、話し合いの指導をしても良いかということそうではありません。

話し合い指導の前に重要なことがあります。

豊潤な学級風土の醸成

例えば、次のようなことが必要です。

子どもたちの弱肉強食関係が、ある程度是正されている。

これは授業中はもちろん、休み時間、給食時間など、あらゆる教育活動を通して、そうなっている必要があります。ある押しの強い子どもの意見が、いつも通るような学級では話し合い活動は活発にならないということです。

また、間違いが許される、間違いのは当たり前だという許し合いの関係ができていない必要もあります。

こうした関係を学級に作ることは、さして難しいことではありません(と思います)。

それは、教師が次のようなことをすればよいのです。

すなわち、それは……

勉強ができる子（強い子）が間違え、勉強ができない（と思われる）子（弱い子）が正解を出すような授業をすればよい

のです。

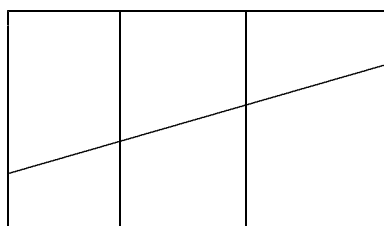
教師は、重大な職業病を抱えている場合が多いです。

それは、正しいことを教える仕事であるという自覚がもたらす、正答主義という疾病です。

意識するしないは別として、効率的に、最短である正しい知識を教えようとするために、（結果的に）勉強ができる子どものみを活躍させてしまうのです。

それをなんとかすべきです。

例えば、小さなことでよいのです。



左の図形に隠れている、四角形はいくつあるでしょうか？

左のような問題があります。

こうした問題は、算数の得意な子が間違えて、地道で目立たない子が正解したりします。

このような問題を時々出

してあげるのです。

すると、子どもたちの関係は少しずつ変わり始めます。

あるいは……

子どもの誤答を最大限に授業に生かせればよい

のです。

間違いを授業の中心にして、授業を進めてしまうのです。

- ・「 さんの間違いは、まるっきり間違いなのだろうか」
- ・「 さんの意見に賛成か、反対か話し合ってみよう」

こうしたことを続け、さらに学問には「間違い」がつきもので、それが学問の発展に貢献してきたお話をすれば、もっといいのでしょう。

例えば、エジソンの失敗の話でもいいし、「間違い」の産物である「ニュートリノ」の話もいいでしょう。

さて、今ひとつは、授業の話ではなくりますが、次のようなことを教師が学級経営に取り入れている

かということです。

### 子どもたちの「裏文化」を教室に持ち込んでいるか

子どもの世界には、いつでも学校文化とは違う「裏文化」が存在します。

カブトムシを捕まえるのがうまい、将棋がうまい、ゲームのキャラクターをやたらと知っている……。

そうしたことは、実はオモテの「学校文化」より強く子どもたちを支配している場合があります。

そして、そうした文化を学級に持ち込むことが、全体として「学校文化（正答主義、勉強ができる子＝いい子）」を薄めることになり、子どもたちをのびのびとさせることになるのです。

さて、以上のようなことをすることで、子どもたちの関係は風通しが良くなるし、また「間違いを許し」「間違いを生かす」子どもたちになっていくはずですが、

しかし、それよりも更に重要なことは次のことです。

### 間違いを恐れない強い子が育っているということ

誰になんと言われても自説を堂々と展開するような子どもを育てることは、話し合い活動での目的であると思っています。

そして、そうした子どもを育てる為には、やはり教師の戦略が必要になるわけです。

それは、为什么呢。

まず第一に、子どもを優しく包む反面、壁を与え、それを克服するような場面を用意することです。

例えばこんな具合に。

私は、始業式の次の日、全員を体育館に連れて行き、ステージに上がらせて、スピーチをさせたりします。

むろんスピーチの準備はさせます。

その上で、体育館の一番後ろに立って、「ここまで聞こえるような声でスピーチしなさい。話したい人からどうぞ」と言います。

それで、すぐに話す子がいるかどうかはその学級によります。

やんちゃな男の子が、「ようし！」と言って話し始める場合もありますし、しーんとしてしまう場合もあります。

しーんとしてしまう場合、私は、ひたすら最初のひとりを待ちます。

そして、もし一人が重苦しい雰囲気破ってスピーチをしたときは、大絶賛してあげます。

そのことで、次々と子どもたちはスピーチをしていきます。

全員ができたところで、『自分と自分の周りの人のがんばりに、拍手！』と言います。

子どもたちを育てるには、このような「克服体験」を多く積む必要があるように思います。

ところで、「子どもを信じる」というような言い方がありません。

それは、何か問題が起きたときに「私はあの子を信じている」というように使われることが多いです。もちろんそれでいいわけですが、もう少し積極的な意味で子どもたちを信じたいと思います。私は上のような場面でこそ「子どもを信じ」て、待つべきだと思います。そして、「子ども信じる」という言葉を、問題があったときではなく、その子の自ら伸びる力に対して使いたいなあと常々思います。

話し合い方の指導をどのようにするか。

さて、いよいよ話し合い方の指導です。

まず、第一に話し合いに子どもたちを導くためには、「論題（ここでは話し合いのテーマの意）」が必要です。論題があって初めて話し合いが始まります。

その論題は、様々なものがあります。

- ・ ござつねは、最後に快く死んでいったのですか？
- ・ 長篠合戦で、旗は誰に見せるためのものですか？
- ・ 平行四辺形の面積を、早く正確に求めるには、どの方法がいいですか？
- ・ 学級レクであるゲームは何がいいですか？
- ・ 天塩町を、誰にとっても住みやすい町にするためには、どのような方法がよいですか？

以上のようなその教科・領域の特性に合致した論題が無数に考えられます。

しかし、やはり話し合いに適した論題となるとある程度の条件があるようです。

例えば、次のようなことが言われています。

児童生徒たちに提示する課題が適度な不確実性を含む問題であるべきである。

塩田芳久『授業活性化の「バズ学習」入門』（明治図書）

「よい発問」とは、答が分裂するような発問なのである。

向山洋一「国語教育」86年12月号（明治図書）

これは考えてみれば当たり前ですが、「決まり切ったこと」を話し合うほど形式的で、ばかばかしいことはないということです。

さて、それで「よい論題」さえ子どもたちに提示すれば、豊かな話し合い活動が起こるかということ、無論そうではありません。

そこに、話し合い指導の難しさがあります。

話し合い指導の第一歩

その第一歩は間違いなく次のことです。

論題に対して、すべての子が意見を持っている

ということです。

これは、1年生でもすんなりできる場合もあれば、高学年でもなかなかできない場合もあります。

一番最初は、教師が問題を出し、ノートに か×かを書かせるというようなことをさせます。

低学年であれば、もっと遊びを取り入れてもいいでしょう。

例えば、「 ×クイズ」を毎朝してみるなどです。

ここで、重要なことは、「すべての子」ということです。

×クイズの場合、全員が頭の上で、 か×かをあげているということが大切ですし、ノート作業の場合は、全員がノートに ×を書いているということが大切です。

「決められない」という状態を許してはいけません。

そのためには、はじめは ×を決めやすい問いにしてあげるわけです。

また、たとえ間違えても精神的圧迫が少ない問いを用意することが大事ともいえます。

そして、最終的には、授業などで重要だと思われる論題でも、「決める」ことができるようにしたいです。

それでも、なかなか決められない子どもが中にはいます。

その子には次のように私は言うことにしています。

『 か×かをノートに書きなさい。』

.....

『まだ書かない人、手を挙げる』

.....

『3人いるね、3秒で決めなさい。どうせみんなわかんないんだから。迷ってても、明日の朝まで決まらないよ』とにっこり笑います。するとだいたいかけるのですが、それでもかけない子が10年間で一人だけいました。

そのときは、私は、にっこり笑ってこう言いました。

『よし、じゃあ先生が決めてあげようね』

その子は、初めのうち、私に決めてもらっていましたが、いずれ自分で決められるようになりました。

つまり、教育実践は、ぎりぎりまで100パーセント達成を目指すわけですが、どうしてもあと一人二人ができないときがあるのです。

そのときは、優しく対応するのです。

最後まで、100パーセントを求めては、教師も子どももつらいのです。

.....停電になりそうなので、今週はここまで。